

円珠本『朗詠要抄』の博士譜に反映する アクセントの予備的分析

加 藤 大 鶴

1 本稿の目的

漢詩に音楽的な旋律を付け日本語の訓読文の形で読み上げる漢詩朗詠に、日本語アクセントの反映が想定されることは、金田一春彦1974: 230や、蒲生郷昭1978における金田一の談話などで言及されることはあったが、これまで実証的な研究対象とされては来なかった。加藤大鶴2022では、残存する朗詠古譜のひとつ因空自筆本『朗詠要抄』（延慶二年・天理大学図書館蔵）の朗詠譜を取り上げ、それが院政鎌倉期の京都アクセントを反映することを論じたことがある。また拙稿2023では同資料の漢語に附された博士譜からアクセントを推定し、『和漢朗詠集』鎌倉期加点諸本声点から推定されるアクセントよりも、それが日本語により馴染んだ様相を呈していることを報告した。以上の報告から敷衍して考えると、金田一が夙に言及するように、他の朗詠古譜本もアクセント研究に有用であることが期待される。

次節で触れるように朗詠古譜は知られる限り7本の残存が確認されているが、それらの博士譜がアクセントを反映するかは未だ分かっていない。もちろん伝承本の博士譜が相互にどのように関連しているかについても、ほとんど明らかにされていない。本稿の目的は、現存する朗詠古譜の別本、円珠房喜淵筆『朗詠要抄』（大原三千院円融蔵、原本にて確認）の博士譜が日本語アクセント史資料として利用可能であることを論じる上での予備の手順と位置づけ、①古譜本における本資料の位置づけについての整理、②博士譜とアクセントの対応関係についての分析、を行うことにある。

2 円珠本『朗詠要抄』をめぐる伝本

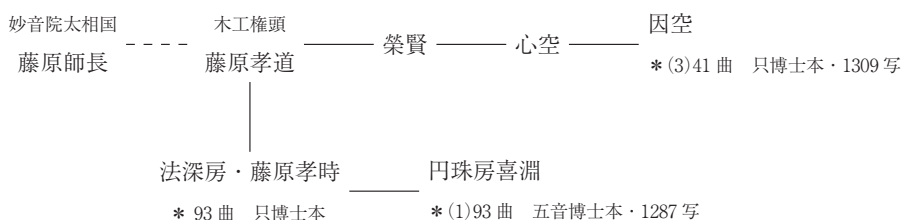
現存する朗詠古譜⁽¹⁾のうち、奥書などから伝来が分かる「四古譜」には、(1)『朗詠要抄』弘安十年(1287)円珠写(以下、必要に応じて「円珠本」)・93曲、(2)『朗詠要集』正応五年(1292)聖玄識語・70曲、(3)『朗詠要抄』延慶二年(1309)因空写(以下、必要に応じて「因空本」)・

(1) 蒲生郷昭1978が「四古譜」と呼ぶ因空筆『朗詠要抄』(只博士本)、円珠筆『朗詠要抄』(五音博士本)、『朗詠要集』、『朗詠九十首抄』のほかに、陽明文庫蔵『朗詠譜』(鎌倉末期か)、金沢文庫蔵『朗詠集』・『朗詠』八首などがある。

41曲、(4)『朗詠九十首抄』文永五年(1448)源有俊識語がある」という(蒲生郷昭1978他)。

漢詩の異同等から各朗詠譜本は藤家流と源家流に分かれることが知られるが、(1)～(3)は藤家流、(4)は源家流であるとされ(小野恭靖1990・青柳隆志1993他)、本稿で扱う円珠本は大きく見れば拙稿2022で報告した因空本と同じ伝承のなかにある譜本と言える⁽²⁾。両本の奥書等から判明する伝承関係は図1に概略を示すとおりである。

図1 因空本『朗詠要抄』と円珠本『朗詠要抄』の伝承関係



さて、天台声明の変革期に誕生した大原流声明は、良忍以後を大成期と見て家寛、智俊、湛智に至って全盛期を迎えたことが知られる(以下、新井弘順1988: 74-85・片岡義道1972: 33-79に基づく)。湛智は新たに雅楽の理論を援用して、宮・商・角・徵・羽の五音を用いて音階名の統一を図り、新たな音律論を打ち立てた。本資料の博士譜の記法と考えられる五音博士そのものは、この湛智によるものと考えられており、その概略は最古の五音博士譜『引声次第』(寛喜3、1231写)にも示されるという。湛智、その弟子である宗快の後を継いだ円珠坊喜淵(1254-??)は師説を受け継ぎ、天台大原流だけでなく真言声明南山進流との交流を通じて、五音博士を多用するに至ったらしい。

本稿に用いる円珠本『朗詠要抄』には次のような奥書がある。

弘安十年五月十八日以法深房本書之畢 円珠

(朱) 同年同月廿七八両日付博士畢但本ハ只博士也云々 円珠

(朱) 同年六月一日二日両日之間於今出川宿所

奉伝受畢 此本尤可秘云々 円珠

これによれば、まず弘安10(1287)年5月に藤原孝道(1166-1237)の子、法深房こと孝時所持『朗詠要抄』から円珠が詞章本文を書写したことが分かる。翌6月に博士を写すが孝時所持本

(2) 藤家流と異なる源家流の詞章について、次の如く言及する箇所もある。「開ス」徵(ヒラ)角..宮(ケ)..^{②⑩}の右傍に「ヒラカ 源家ニハ此假名ヲ用也」とあるのは、本資料の伝承が藤家流であることを間接的に示しているよう。

は只博士（後述）であった。円珠本は内題に「朗詠譜 五音」とあり、また博士譜自体からも分かるように五音博士本（後述）である。要するに元は只博士だったものを、五音による音律論を確立した湛智の孫弟子にあたる円珠が、五音博士に翻譜したということである。

この孝時所持の只博士本は所在不明であるが、次に示すようにその写本と思しき伝本等がある（小野恭靖1993）。

- 1-1. 円珠自筆本（三千院円融蔵・俯Ⅱ19）
- 1-2. 魚山叢書・勝林院蔵 A 本（天台五音博士本、鼻・第63所収⁽³⁾）
- 1-3. 明倫写多紀道忍旧蔵（渋谷亮泰『昭和現存天台書籍綜合目録』大正15・18年に記載、所在不明）
- 2-1. 魚山叢書・勝林院蔵 B 本（只博士本、眼・第20所収）
- 2-2. 国会図書館蔵本（高野辰之大正5年写、元は来迎院蔵本（逸書））⁽⁴⁾

1-2と2-1は奥書によると覚秀という僧が関わって勝林院蔵本から江戸期に写したものと分かる。両本とも1-1円珠本の本奥書を持つから、1-1系統の写本と考えて問題はないと思われる。ただ、1-2は五音博士本であるから良いとしても、2-1は只博士本であるから伝来の経緯は判然としない⁽⁵⁾。2-2も只博士本であり大正期に高野辰之が来迎院蔵本（所在不明）から写したとされるもので、1-1の奥書と2-1の奥書を有することから、2-1の系統であることは間違いない。1-3は1-1の系統であると推定される（小野恭靖1993）が所在不明であるため確認できない。

いずれにしても、1-1円珠自筆本が五音博士に翻譜する以前の形態を持つ、2-1勝林院蔵 B 本によって、五音博士の理解を補うことができる。

3 円珠本『朗詠要抄』について

円珠本『朗詠要抄』の書誌解題についてはすでに小野恭靖1993に詳述がある。稿者も原本調査を行いその記述を確認した。

(3) 魚山叢書は勝林院蔵 A・B 本ともに東京大学史料編纂所蔵のマイクロフィルムにて確認した。A 本・B 本とも元奥書に続き「弘化三（1846）年六月四日於大原勝林院以円珠房喜淵上人本書写畢 覚秀」（A 本）、「文政三（1820）年十月廿八九三十三箇日之間以大原如来蔵本書写校合畢 秀雄／是本先師書写之御本也于傳領之畢 覚秀／天保十二（1841）年七月八日記之」（B 本）とある。

(4) 国立国会図書館蔵のマイクロフィルムにて確認した。

(5) 小野恭靖1993によれば、2-1の魚山叢書 B 成立について、元奥書右側に「原本五音博士奥書云」とあることを根拠に①只博士古本（孝時所持）→五音博士本（円珠写）→只博士新本（B 本）という道筋を想定しながら、②只博士古本（孝時所持）→只博士新本（B 本）という道筋も捨てきれないとする。

本資料は一冊本、斐紙による全35丁、列帖装である。表紙左上に外題「朗詠要抄」、左下に「円融蔵俯二」と直書きされる。第3丁から5行書きで本文が始まる。詞章本文は漢字片仮名交じり文で、右傍または左傍に博士譜（天台五音博士）が記され、博士には仮名で発音注記が加えられている。詞章本文に圈点による声点が51文節に差される。濁声点は双点である。1例だけ傍らに添えられた仮名注に星点による声点あり。博士譜から離れた位置に仮名注が記される場合もある。全体に虫損部分等に対して補修、裏打ちがなされており、博士譜や発音注記が見えにくくなっている部分がある。

第35丁表まで朗詠句90曲（1405例の文節）があり、裏には奥書がある。第36丁裏に一紙が貼付され、追加3曲が補入される⁽⁶⁾。以上は墨筆によるが、朱による書き入れもある。句切れの単点のほか、朗詠の方法や詞章の伝来に関わる記述もある。朱墨とも同筆で、筆跡から見る限りすべて円珠書写による自筆本と考えられており、稿者もその見方に異論はない。

4 五音博士と言語的な音調との対応関係

天台声明に淵源を持つ博士は音楽的旋律の動きを反映した記号の一群である。本稿に用いる円珠本『朗詠要抄』は既に述べたように孝時所持本の只博士を五音博士に翻譜したのであるから、同じく只博士本の因空自筆本『朗詠要抄』に京都アクセントが反映するのであれば、円珠による五音博士本にも同じことが期待される。さて、本稿は音楽的旋律の解明ではなく、博士譜の音楽的旋律から日本語アクセントの反映を読み取ることを目的としている。因空自筆本を分析の対象とした拙稿2022でも、始めに着手すべき分析の手続きとして、アクセントが博士譜のどの部分と対応するかを問題にしなければならなかった。したがって円珠自筆本『朗詠要抄』においても同様の問題から着手することとする。

朗詠を含む声明の博士についても片岡義道：1972・新井弘順1988が詳しい。博士のうち旋律の動きを線の相対的な屈曲で示す只博士は、^{しゅっどん}出音（起点位置）が音高と一定の関係があり、さらには漢字音の声調とも一定の関係を持っていた。拙稿2022では因空自筆本『朗詠要抄』の只博士とアクセントとの対応を分析したところ、①博士譜の角度（向き）が言語音としての音調の高低差に対応する、②博士譜が屈曲して続く場合であっても、基本的には開始部から第1の屈曲までのみが言語音の1拍と対応する（漢字表記された字音では第2の屈曲までが2拍に対応）、③博士の開始位置が言語音としての音調の高低差に対応することもあることを指摘した。

一方の五音博士は、只博士と異なって音高を博士の線の角度のみに拠り、その具体的な音階を表す。いま湛智『声明用心集』に記載される上中下三種の五音博士図のうち、「日本の神楽の五

(6) これらは第35丁表までの訓読体と異なり、漢文体で詞章が記される。しかし博士譜は訓読を元に記されており、詞章とのズレが興味深い。和漢朗詠集諸本などから推測するに元は詞章が漢文体で記される場合もあったものと見られる。

音（律旋法）」を表す「下曲」の博士図を図2⁽⁷⁾に示す。またこれを元にして、理解のために作成したものが図3である。

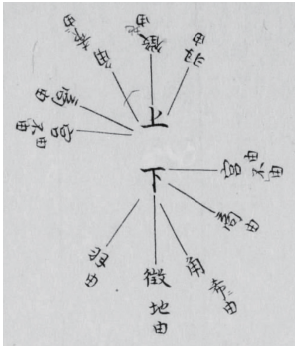


図2 湛智『聲明用心集』「神楽ノ五音下」

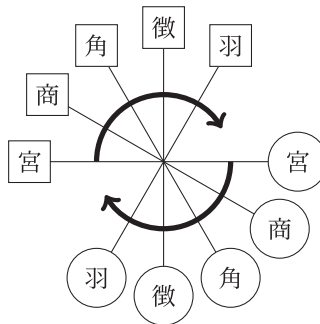


図3 五音博士図（『聲明用心集』下曲を元に作成）



図4 分解した五音博士図（図3をさらに抽象化）

五音博士はこのように中心から放射状に角度を変えて音階を示す仕組みとなっている。新井によれば、「この大原流の五音博士は、水平線を宮、垂直線を徴とし、詞章の一字を上下に分け、上は左水平線を宮として上に向かって、下は右水平線を宮として下に向かって、それぞれ時計廻り（順）に五音の博士が三〇度間隔で付されている（下曲）。上下の五音は音域（重）を示すのではなく、単に最初の音（出音）と次の音との高低の関係によって使い分ける。すなわち出音に対し次音が高くなるときは上の五音を、低くなるときは下の五音をそれぞれ用いる」（新井弘順1988: 80-81）とある。これは要するに、原理としては対角線上にある音階同士は等価であり、博士譜の続き方によって上部・下部が使い分けられるということである。博士譜は文字の右側であれ、左側であれこの図が示す中心点から起筆するのであるから、例えば詞章の左に博士が記される場合、出音[宮]から「徴」に遷移するのであれば音階が上がるわけであるから、詞章から水平左に伸びた譜の端から垂直に上に進む[徴]が記される。詞章の右に博士が記される場合、出音[羽]から「徴」に遷移するのであれば音階が下がるわけであるから、詞章から右斜め60度の方向に伸びた譜の端から垂直に下がる[徴]が記されることになる（図6参照）。

以上から考えると、どの音階であるかを特定するには、詞章の左右・出音の位置などに拘泥せず、偏に博士譜の角度にだけ着目すれば良いと言うことになる。すなわち、図4に示すように、0度なら宮、時計廻りに30度なら商、60度なら角、90度なら徴、120度なら羽と考えればよい。

またアクセントの反映を分析する上では、因空自筆本『朗詠要抄』の場合と同様に、旋律の動

(7) 新井弘順1988: 80に示される図は、1837年明倫年間の写し、叡山文庫般舟院本によるという。図2は国書データベース (<https://kokusho.nijl.ac.jp/biblio/100231723/1?ln=ja>) にて公開される宮内庁書陵部本で、文政9(1826)年鷹司政通による写本。

きを全て言語の音調と対応させるわけではない。宮商角徴羽によって動く旋律は、詞章の文字表記1字ごとに複合的なかたまりを構成している。いまこれを仮に「複合譜」と名付け、それを構成する単独の譜を「構成譜」と呼ぶことにする。詞章1文字には1つの「複合譜」が添えられるが、時折「構成譜」1つだけが対応する場合もある。そのような場合は、「複合譜」に対して「単独譜」と呼ぶことにする。

さて分析においては、基本的に複合譜・単独譜を構成する開始部の構成譜が言語音の第1拍に対応すると考えられるが、1字が2拍で実現する漢字音や語（「山」サン・ヤマなど）には開始部の次の構成譜までが対応すると考えられる場合もある。そこで博士譜の記録・記号化は基本的に2つめの構成譜まで取り上げることにし、さらに続く場合は「..」で省略したことを示す。ただし2拍以上の字音・語のなかには、2つめの構成譜を越えてさらに続く構成譜に対し小書きの発音注記の形で詞章を記す場合もある。そのような場合は構成譜に対応させる形で（ ）に仮名による発音注記を記した（後述するように「ずらし表記」と連動して博士譜終端に位置する場合は仮名だけを記す）。丸数字は円珠本の曲番号である。

この他、極端に短い博士譜は念のため【 】に記した。複合譜・単独譜の境界は「-」で区切るものとする。詞章が仮名表記の場合は【 】に語義を示す。朱筆による博士譜があれば〔朱〕を、声点があれば〈平〉などと記す。末尾には曲番号を付す。拍や文字に対応する箇所期待される記号類がない場合は*を付す。具体的には、次のような形式でデータを示す。

- 「ウチニ【うちに】」角商..宮-宮〔羽〕..③（図5参照）
- 「人ニ」羽（ヒ）徴（ト）-徴角..⑤⑦（図6参照）
- 「^{エツ}幽咽ス」羽（イ）徴（ウ）-徴（エ）..宮（ツ）-角商..③（図7参照）

5 博士譜と拍の対応関係

次に、博士譜が、詞章における日本語のどの拍（モーラ）と対応関係を持つかについて確認しておく。本資料の詞章は漢字片仮名交じり文で表記されている。漢語はほとんどが漢字表記⁽⁸⁾、和語は漢字表記と片仮名表記との両様である。博士譜は全ての詞章に右傍あるいは左傍に付いて、句の音楽的な実現を余すところなく行えるようになっており、詞章を構成する拍とは明らかに連動している。詞章のうち仮名で表記されるものだけを見ると、1字1拍に単独譜が対応する場合はそれが拍の音調と連動しており、1字1拍に複合譜が対応する場合は、後に見るように開始部の構成譜が拍の音調と連動する。1字2拍以上の場合は、基本的に複合譜が文字に対応し、開始

(8) 漢語で仮名表記される詞章は、「ムメ」宮〔角〕..徴角..②と「野タウ」徴（ヤ）羽-徴角..角商..⑧の2例のみである。

部から順に構成譜が拍の音調に対応する。



図5 「ウチニ」③



図6 「人ニ」⑤⑦



図7 「幽咽ス」③



図8 「西岸ノ」②

具体例を図5～8に示す。図5のように詞章本文の仮名1字に複合譜・単独譜が対応する場合もあれば、図6で示すように、構成譜に添えられた仮名の発音注記に対応する場合もある。漢語の場合は、図7「^{エツ}幽咽ス」羽(イ)徴(ウ)-徴(エ)宮(ツ)-□(汚損)③のように、1つの構成譜に対して発音注記の形で拍との対応が示される場合と、図8「西岸ノ」羽徴(イ)-徴-徴角②の「岸」字のように2拍1音節「ガン」に対して構成譜1つが対応する場合とがある。いずれも仮名の発音注記は構成譜の開始位置近くに添えられている。

なお漢字音では—ウ、—イなど母音韻尾、—ム、—ンなど鼻音韻尾、—ツ、—クなど入声韻尾を仮名で記す場合、韻尾部分に1つの構成譜が与えられる場合があり(図7の「幽」参照)、原則的には拍として自立していたと考えてよいであろう。

これに対し、「ツ」または「フ」がややずれた位置に記されることがある(図7の「咽」左傍仮名注「エツ」の第2字参照)。これは浅田健太朗1998が「ずらし表記」と報告するものであり、主として舌内入声が続音との関係で促音化する場合や、喉内入声であっても促音化する場合に現れる。またハ行四段活用動詞連用形が音便を生ずる場合にも現れることがある。これは「酔フシ」weΦ(i)-si、「匂フテ」niΦoΦ(i)-teの下線部が、無声両唇摩擦音の持続として実現したこと(「Φ音便」築島裕1965: 研究篇133、肥爪周二2014)の証左でもあろう。

●舌内入声が促音化する場合

- 「一卷(イツクエン)ノ」角商..宮-宮[角]..⑤②
- 「滅(メツ)ス」宮(メ)[羽]..(ツ)-角商..⑦②
- 「葛稚(チ)仙カ」羽(カツ)-宮-宮(セ)[角]..徴(ン)-徴角②⑨

●喉内入声が促音化する場合

- 「俗骨(シヨツコツ)」角-徴(コ)角(ツ)⑨②

—「三百盃ト」商徴（ム）-徴（ヒヤツ）-徴角（ハイ）-徴角..④⑦

●ハ行四段活用動詞連用形の音便

—「酔（エフ）シ」徴（エフ）-徴角..⑧⑧

—「匂（ニホフ）テ」徴（ニホフ）-徴角..⑧⑧

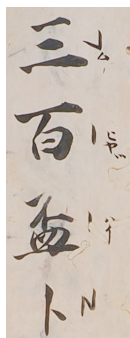


図9 「三百盃ト」④⑦

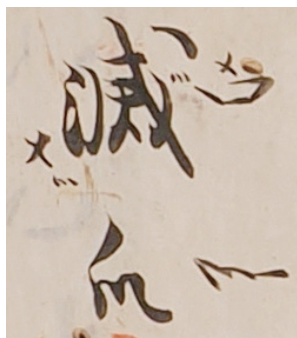


図10 「滅ス」⑦②

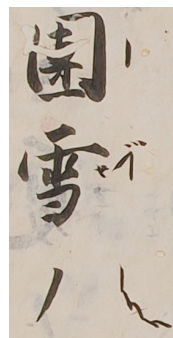


図11 「團雪ノ」⑭④

「ずらし表記」部分と博士譜との対応関係については、「ずらし表記」された拍を含む音節全体が単独譜に対応する場合（図9）と、「ずらし表記」された拍だけが構成譜の終端に記される場合（図7・10）とがある。後者は「ずらし表記」された拍に譜が与えられていないと見ることができる。譜と「ずらし表記」の「ツ」の対応関係はこのいずれかだけであって、「ツ」部分に独立した構成譜が与えられることは一例もない。この点では、開音節化した発音と考えられる場合においては構成譜が与えられることもある（図11・「團雪ノ」徴-羽（セ）徴（ツ）-徴角..⑭④）ということと一線を画している。

以上から考えると、日本語の拍は原則として博士譜を担いえる最小単位ではあるから言語的な音調の変化を反映できるが、促音（Φ音便含む）は前接拍と結びついて一つの単位をなすために言語的な音調の変化を知ることは出来ない、ということが分かる。

6 漢語に付された声点と博士譜の対応関係

本節では博士譜が言語音と対応するかを調べるために、詞章に付された声点と博士譜との比較を行う。詞章本文に差された声点はすべて漢語を対象としている。93曲の詞章をすべて文節単位に区切ると、1410データとなるが、そのうち漢語を含む51文節に声点がある。声点は圈点、濁声点は双点で示される。

一般的に、六声体系の場合、東声点（平声軽点）= F/HL、平声点 = L/LL、上声点 = H/HH、去声点 = R/LH、入声点 = LL、徳声点（入声軽点）= HHを表すとされる。本資料の差声体系は、これらのうち平声軽点と入声軽点の痕跡を残す。ここでは博士譜の旋律が言語的な音調と対応す

ることを検討することを目的としているので、声点が表示する体系についての言及は別の機会に行う。また博士譜の旋律と言語的な音調の関係を確かめるうえでは、平板の音調（低平と高平）、下降する音調、上昇する音調が分かれば良いので、入声・入声軽点は扱わない。

さてこの作業を行う前に、注意すべき事がある。それは句頭に位置する詞章が音楽的旋律の影響を受けて、低く実現することがしばしば観察されることである。例えば、漢音で読まれたと思しき次の例は、韻書で次濁平声＋次濁去声の組み合わせであるから、調値から考えられる発音はLLLHだったと推測される。しかるに博士譜を見ると、第1字の商は第2字の徴よりも低い旋律となっている。

●「雲夢」商-徴（ホ）羽（ウ）：〈平去濁〉②⑥

こうした朗詠上の傾向は因空本『朗詠要抄』でも確認されたことである（拙稿2022）。このため7節を含む以下の分析では、原則として句頭位置を除いて扱う。また声点が表示する音調は、非語頭環境では声調変化やアクセント結合上の変化を起こした結果を反映することが屡々あり、韻書との関係から説明することが困難な場合がある。したがって、ここでは句頭環境を除く語頭環境だけを扱うことにする。

6.1 東声点（HL）と対応する博士譜

東声点は数が少ない上に語頭位置には1例も現れないので、この項のみ方針を違えて出現例全てを掲げることとする。なお東声点が現れるのは2拍字ばかりであり、1拍字は含まれない。東声点が差される7例のうち4例に当たる1.～4.は積極的にHLと解釈可能な譜となっている。例えば1.「清光ヲ」宮-角宮（ウ）-宮[角]..:〈平東*〉を例に取れば、LLHL-Lの反映と解釈されよう。5.「酒軍」は句頭環境かつ単独譜であり解釈は難しいが、言語音HHLの第1拍が句頭のため低下しており、第2拍の高さが語末まで続く旋律か。4.「山」6.「蹠」^{シヨウ}は、第1字が高く始まったことが影響して、1語としてひとまとまりになろうとする力が旋律上に働いたか。

以上から声点の表すHLの下降調と博士譜の下降旋律はおおむね対応していると考えられる。

1. 「清光ヲ」宮-角宮（ウ）-宮[角]..:〈平東*〉⑮
2. 「商山ヲ」徴-羽（サ）徴（ン）-徴角:〈平東濁*〉②④
3. 「峴山^{ケンサン}-ノ」徴-羽徴（ン）-徴角:〈平濁東*〉③⑨
4. 「群山ニ」宮（クン）[羽]..-角（サ）商..宮（ン）-宮[角]..:〈平東濁*〉③③
5. 「酒軍」商（シユ）-徴（クン）角:〈上東〉⑤*句頭
6. 「緱山^{コウ}ノ」羽-宮[角]..徴（ン）-徴角:〈*東濁*〉④④
7. 「玄蹠^{クエンシヨウ}ヲ」羽-宮-宮[羽]..:〈平東濁*〉⑥①

6.2 平声点 (L/LL) と対応する博士譜

ここに現れる平声点は本来は東声点だったものが移点の際に平声点となってしまったと考えられるものを含む。したがって平声点で差されたうち、漢音であると考えられかつ韻書で次濁・全濁音に分類されるもののみを対象とする。

ただちに気づかれるのは東声点に対応する譜と異なって、2拍で実現する全ての字で1つの構成譜 (= 単独譜) に収まっていることである。要するに1音節の中に旋律の変動がない。これは平声点の表す音調がLまたはLLであることと矛盾しない。1～4は漢語部分をみれば〈平平〉と、語全体としても平らな音調であり、3.「神仙ヲ」4.「鼈波」は博士譜も平らな旋律である。2.「蘭肴」は第3拍まで平らな旋律を保ったか。5.「祠ヲ」は助詞「を」が低く平らな名詞に高く付いたものと考えられ、漢語部分のLが平板な旋律に反映したと見なすことが出来る。

以上から声点の表すLないしLLの低平調と博士譜の平らな旋律は対応していると言える。

1. 「群山ニ」宮(クン) [羽] ..角(サ) 商..宮(ン) -宮 [角] .. : 〈平平濁*〉 ㉔
2. 「蘭肴」徴(ラン) -徴(カ) 角..角(ウ) .. : 〈平平〉 ㉔
3. 「神仙ヲ」宮-宮-□ (虫損) : 〈平平*〉 ㉔
4. 「鼈波」徴-徴 : 〈平平〉 ㉔
5. 「祠ヲ」徴(シ) -羽 : 〈平*〉 ㉔

6.3 上声点 (H/HH) と対応する博士譜

ここに現れる上声点は韻書で上声かつ非全濁字のもの (1.「彩ヲ」) と、韻書で去声だが1拍のために高平拍となったもの (2.「舎ニ」 3.「座ニ」) とを含む。

1はHHに助詞「を」が高く付き、文節全体で平らな音調となったものが旋律に対応する。2と3は博士譜を開始部から第2の構成譜まで捉えると徴羽であり、2拍相当に長呼化して上昇の旋律を示している可能性がある。その場合、声点が示す高平拍(H)化以前の上昇拍(R)を博士譜が反映しているとも考えられる。いずれも後接する助詞「に」は高く付き ([] に示したのは非常に短い構成譜? で十分な旋律を与えられていない可能性がある)、R-Hという音調を反映するか。韻書で去声1拍字に上声点が差される場合、博士譜が元の上昇拍を表すかに見える事例は因空本にも見受けられる。

以上から声点の表すHHの高平調と博士譜の平らな旋律は対応している。また声点の表す音調がHであっても元がRであるものには上昇の旋律が対応する可能性がある。

1. 「彩ヲ」宮-宮 [角] .. : 〈上*〉 ㉔
2. 「舎ニ」徴羽- [角] 羽 : 〈上*〉 ㉔

3. 「座二」徴(サ)羽-〔角〕羽：〈上*〉⑤①

6.4 去声点(LH)と対応する博士譜

去声点が差されるもののうち、2.「屏風」は呉音語、他の2語は漢音語と考えられる。去声点が差される字はいずれも2拍で実現しており、2つの構成譜に対応するとみて良いだろう(2と3は明示的)。ここでは扱っていない句頭位置も含め去声点が差される字はすべて2拍であり、1拍字はすべて高平拍で実現し上声点が差されたものと考えられる。

去声点が差される下記の例はいずれも徴羽と上昇の旋律が対応する。

1. 「勁捷ヲ」徴羽-徴-徴角..：〈去徳*〉⑤⑤
2. 「屏風」徴羽(ウ)-徴角..：〈去濁上濁〉⑤⑤
3. 「萬里ノ」徴羽(ン)-徴-徴角..：〈去濁平〉⑥①

以上から声点の表すLHの上昇調と博士譜の上昇する旋律は対応していると言える。

6.5 小結

漢語に付された声点と博士譜の対応関係を分析したところ、(1) HLの下降調と下降旋律はおおむね対応する、(2) LないしLLの低平調と平らな旋律は対応する、(3) HHの高平調と平らな旋律は対応する、(4) LHの上昇調と上昇する旋律は対応する、(5) 声点の表す音調がHであっても元がRであるものには上昇の旋律が対応する可能性がある、という結論が得られた。声点との関係を見る限り、天台五音博士による旋律は言語的音調を反映していると見て問題なさそうである。

注意が必要なのは、旋律に反映されるのは言語的な音調の「変化」であって、低平と高平のような絶対的な音高の違いを、旋律の違いとして区別することは困難ということである((2)と(3))。「神仙ヲ」宮-宮-□(虫損)：〈平平*〉⑤⑤と「鼈波」徴-徴：〈平平〉⑥⑥は、声点による限り漢語部分はLLLLとLLLだが、博士譜を見れば一方は宮-宮もう一方は徴-徴である。

ただし高く付く助詞が続く場合は低平と高平の区別が可能である。例えば「彩ヲ」宮-宮〔角〕..：〈上*〉⑤⑤では、助詞が独自の高さを有する時代では「ヲ」は前接語に高く付くので、文節全体ではHH-Hが期待される。譜の宮-宮はこれを表したものであろう。もし前接語がLLに助詞「ヲ」が付くなら文節全体ではLL-Hとなっており、前接語の譜が「宮」なら助詞に当たる譜は宮より高い商角徴羽でなければならないからである。この問題は7.1で改めて論じる。

ともあれ、声点と博士譜の対応関係を総合すると、博士譜の旋律から読み取れる言語的な音調は、平板、下降、上昇の3種類ということになる。

7 和語 2 拍名詞のアクセント型と博士譜の対応関係

前節では漢語の声点に着目し博士譜との対応を分析したが、和語のアクセントについても博士譜との対応が見られるかを検討しておきたい。天台声明の旋律はその淵源に漢字声調との強い関わりを持つため、声点と博士譜に対応関係があるというのは当然の帰結かもしれない。本節の目的はそれが和語のアクセントにも敷衍して認められるかを検討することにある。

本節では、まず、句頭を除いて詞章から和語 2 拍名詞を抜き出し、秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊1997によりながら（金田一春彦1951や秋永一枝1991も必要に応じて参照）、体系変化前のアクセント型を HH 型、HL 型、LL 型、LH 型、LF 型に分類する。次に、それらが博士譜の（1）平板な旋律、（2）上昇する旋律、（3）下降する旋律とにどのように対応するかを検討する。単独譜は平らな旋律と解釈するが、これは別途（4）単独譜に分類した。以上を集計したものが表 1 である。

表 1 2 拍名詞アクセント型と博士譜旋律の対応関係（延語数）

ア型\旋律	平板	上昇	下降	単独譜	合計
HH 型	3	6	10	10	29
HL 型	1	4	15	0	20
LL 型	17	3	11	40	71
LH 型	0	7	3	1	11
LF 型	0	20	4	6	30
合計	21	40	43	57	161

30%以上ある部分に網掛けを施したが、一見して HL 型に下降の旋律が多く LH 型・LF 型に上昇が多い。HH 型・LL 型は期待される平板の旋律は少ない一方、そのみでは旋律の変化を示せない単独譜が両型においても目立つ。期待される平板旋律は LL 型にはそれなりに目立つが HH 型には目立たない。全体としてみると、和語でも言語的な音調（アクセント型）と旋律には対応関係があるとみて良さそうである。

HH 型・LL 型のいずれも下降旋律が無視できない量で存在するが、特に HH 型においては 35%も占めており、LL 型の15%と比較すると明らかに目立つことが注意を引く。因空本『朗詠要抄』においても HH 型に対応する旋律には、下降旋律が目立って現れていた。そもそも平らなアクセント型が音楽的旋律の影響を受けやすいと考えることはそう不自然なことではないだろう。ここでは、高く始まる平らなアクセント型が旋律に反映されれば、上昇するよりも下降するほうが無理がないと一応考えておく。

この他、2拍名詞に接続する助詞が高く付くか、低く付くかによって旋律の解釈には変わる部分もある。以下、型ごとに詳細を確かめる。

7.1 2拍名詞 HH型とLL型に接続する助詞ごとの比較

下記のリストでは、2拍名詞のうちHH型・LL型の各語例を掲げ、それぞれ対応する博士譜から読み取れる旋律の動きが平板、上昇、下降、単独譜でどれほどあったかを示した。その際、平板と単独譜については助詞のみが高く接続する場合は「高接」、低く接続する場合は「低接」(ほばない)、前接語の末拍と同じ高さで接続する場合は「同高」と記した。

単独譜で記されるHH型と推定される語のうち続く助詞を見ると、ニ・ヲ・ト・モに「同高」7例が目立つ。「高接」は1例に止まり「低接」はない。助詞が独自の高さを有する時代においては、HH-Hと接続するのが一般的(金田一春彦1951や秋永一枝1991)であるから、これらの事例はHH型を反映した旋律であると解釈できる。

一方、平板旋律および単独譜で記されるLL型に続く助詞では、ニ・ヲに「同高」が7例あるが、それ以上にHH型にはほとんどなかった「高接」が20例ある。これらの助詞はLL-Hと接続するのが一般的であるから、「高接」の20例はLL型を反映した旋律であると解釈できる。

■ 2拍名詞 HH型

1. 風(カゼ): 上昇3・下降3・単独譜3(助詞二高接1)

上昇:「風」角(カ)商商(セ)⑪、「風」角(カ)商..商(セ)②⑥、「風」宮羽徴(セ)⑤⑦

下降:「風ニ」羽徴(セ)-徴角..⑤、「風ヲ」角(カ)商..宮(セ)-宮[角]..⑦⑦ 「風ヲ」角(カ)商..宮(セ)-宮[角]..⑦⑦

単独譜:「風」宮(カセ)[羽]..⑩、「風」徴(カセ)角④①、「風ニ」宮(カセ)角..徴角..③⑧

2. 壁(カベ): 単独譜1(助詞二同高1)「壁ニ」宮-宮[羽]⑩

3. 君(キミ): 単独譜2(助詞ト同高1・モ同高2)「君ト」宮-宮[角]..⑦⑧、「君モ」徴-徴角..⑤④、「君モ」徴-徴羽..⑤④

4. 口(クチ): 平板1「クチ【口】」宮-宮[角]..⑩

5. 国(クニ): 単独譜1「國ナラムヤ」徴(クニ)角..徴-徴-徴角..-角商..④⑦

6. 酒(サケ): 下降1「酒ノ」羽徴(ケ)-徴角..③

7. 塵(チリ): 下降1「チリ【塵】」宮[角]..-徴角..⑦③、「塵ニ」角(チ)商..宮(リ)-宮[角]..⑦⑦

8. 友(トモ): 単独譜1(助詞ト同高1)「友ト」徴(トモ)-徴角..⑦⑧

9. 鳥(トリ): 下降1・単独譜1

下降:「鳥」角(ト)商宮(リ)⑦⑤

単独譜：「鳥」宮（トリ）[角] .. ⑥4

10. 西（ニシ）：下降1 「西ニ」羽（ニ）徴（シ）-徴角.. ⑫

11. 膝（ヒザ）：単独譜1（助詞ヲ同高1）「膝ヲ」宮-宮[角] .. ⑥1

12. 洞（ホラ）：下降2 「洞ニ」角（ホ）商..宮（ラ）-宮[角] .. ⑦0、「洞ニ」羽（ホ）徴（ラ）-徴角.. ⑧3

13. 道（ミチ）：上昇1・下降2・単独譜1

上昇：「道ニハ」宮（ミ）羽徴（チ）-徴-徴角⑤3

下降：「路ニ」角商..宮（チ）-宮[角] .. ⑬3、「路ヲ」羽（ミ）-徴（チ）-徴角.. ⑦

単独譜：「路」宮（ミチ）[羽] ⑤7

14. 水（ミヅ）：平板2・上昇1・単独譜1（助詞ヲ同高1）

平板：「ミツ【水】」宮[角] ..-宮[角] ..：[朱] 宮[角] ..-徴角.. ⑦6、「水ヲ」宮-宮[角] .. ⑬8

上昇：「水ト」徴（ミ）羽（ツ）-徴⑥

単独譜：「水」宮（ミツ）[角] .. ⑤6

15. 峯（ミネ）：上昇1 「峯ニ」宮（ミ）羽徴（ネ）-徴角⑦0

16. 叔父（ヲヂ）：下降1 「舅ニ」羽（ヲ）徴（チ）-徴角.. ⑨0

■ 2 拍名詞 LL 型

1. 家（イヘ）：平板3（助詞ニノ同高3）・下降1

平板：「家ニ」宮-宮⑤8、「家^{イヘ}ノ」徴-徴角②2、「家ノ」宮-宮[羽] .. ⑤7

下降：「家ニカ」羽（イ）宮（エ）..-宮-宮[角] .. ⑦6

2. 色（イロ）：上昇1・下降2・単独譜4（助詞ハ高接1・ヲ同高1）

上昇：「イロ【色】」宮[羽] ..-角商.. ⑦5

下降：「色」羽（イ）宮（ロ）.. ③4、「イロ【色】」徴角..-宮[角] .. ③9

単独譜：「色」徴（イロ）角.. ⑥0、「色」宮（イロ）[角] .. ⑧2、「色ハ」宮（イロ）[羽] ..-角商.. ③、

「色ヲ」徴（イロ）-徴角.. ⑦6

3. 雲（クモ）：上昇1・下降1・単独譜7（助詞ニヲ高接3・低接1）

上昇：「クモ【雲】」宮[角] ..-徴角.. ⑬5

下降：「雲ニ」羽（ク）宮（モ）..-宮[角] .. ⑤5

単独譜：「雲」徴③6、「雲」宮（クモ）[角] .. ④0、「雲^{クモ}」徴③8、「雲ヲ」宮（クモ）角..徴（ヲ）.. ⑨2、

「雲ニ」徴（クモ）角..-宮[角] .. ⑧5、「雲^{クモ}ニ」徴-羽徴⑧9、「雲ヲ」宮（クモ）[羽] ..-角商④4

4. 事（コト）：平板10（助詞ヲ高接3・同高3）・下降1

平板：「コト【事】」徴-徴角.. ⑬9、「コト【事】」宮-宮[羽] .. ④7、「コト【事】」宮-宮[羽] .. ⑥8、

「コト【事】」徴-徴角.. ⑥8、「コトヲ【事を】」宮-宮[羽] ..-角商.. ③2、「コトヲ【事を】」徴-徴-

徴角..③、「コトヲ【事を】」徴-徴-徴角..④、「コトヲ【事を】」徴-徴角..-羽徴..⑥、「コトヲ【事を】」宮-宮[羽]..-角商..⑥、「コトヲ【事を】」宮-宮-宮[羽]..⑥

下降:「コトヲ【事を】」羽-宮[羽]-宮[角]..④

5. 霜(シモ): 単独譜1 「霜」徴⑦

6. 谷(タニ): 下降1 「溪ノ」羽(タ)宮(ニ)-宮[角]..⑤

7. 玉(タマ): 下降2 「タマ【珠】」徴角..-宮[角]..:「朱」徴-徴角..⑤、「タマ【珠】」徴角..-宮[角]..:「朱」徴-徴[角]..④

8. 月(ツキ): 上昇1・単独譜10(助詞ニ・ヲ高接8)

上昇:「ツキ【月】」宮[角]..-徴角..④、単独譜:「月」宮(ツキ)羽..④、「月」宮(ツキ)[角]..⑤、「月ニ」徴(ツキ)-羽徴..⑦、「月ニ」徴(ツキ)角..羽④、「月ニ」徴(ツキ)角..-羽⑦、「月ニ」宮-商⑧、「月ニ」宮(ツキ)-商:「朱」宮(ツキ)[羽]..-角商..⑧、「月ヲ」徴-羽⑧、「月ヲ」徴(ツキ)-羽徴..④、「月」徴羽(ヲ)⑨

9. 波(ナミ): 単独譜7(助詞ニヲ高接3・ノ同高1) 「浪」宮(ナミ)⑧、「波」徴(ナミ)角..⑧、「浪」宮(ナミ)[角]..⑧、「浪ニ」宮(ナミ)[羽]..-角商..⑧、「浪ノ」宮(ナミ)-宮[角]..⑧、「浪ヲ」宮-角宮..⑤、「浪ヲ」宮(ナミ)-角⑥

10. 花(ハナ): 平板1・単独譜4(助詞ニ高接1・ニヲノ同高2)

平板:「ハナ【花】」徴-徴角..⑪

単独譜:「花ニ」徴-徴角⑬、「花ニ」徴(ハナ)-羽⑧、「花」宮(ハナノ)[角]..③、「花ヲ」徴-徴角..⑤

11. 鞭(ムチ): 平板1 「ムチ【鞭】」徴-徴⑤

12. 姪(メイ): 単独譜1 「甥ナレハ」宮-商-宮[角]..-宮[角]..⑨

13. 者(モノ): 平板2(助詞ハ同高2)・単独譜2(助詞ハ同高1)

平板:「モノハ【者は】」徴-徴-徴角..⑦、「モノハ【者は】」徴-徴-徴角⑦

単独譜:「者」徴(モノ)角..⑥、「者ハ」徴-徴角..⑦

14. 山(ヤマ): 下降2・単独譜1(助詞ヲ高接1)

下降:「山」羽(ヤ)宮(マ)..⑤、「ヤマ【山】」徴角..-角商...⑥

単独譜:「山ヲ」徴-羽⑧

15. 夢(ユメ): 単独譜3(助詞カヲ高接2) 「夢」徴③、「夢カ」徴-羽徴..④、「夢ヲ」宮(ユメ)[羽]..-角商..④

7.2 2拍名詞 LH型とLF型に接続する助詞ごとの比較

LH型とLF型に続く助詞の旋律についても見ておく。前項に挙げた先行研究では助詞ガ・ト・ニ・ハ・ヲは、LH型に続く場合はLH-H、LF型に続く場合はLF-Lという。下記のLH型では

助詞ヲが後に続くものは全て「低接」で、先行研究に合わない。LF型では8.「窓」の1例が「同高」で他は全て「低接」である。すなわち本資料ではLH型とLF型は助詞アクセントの接続の仕方という点では、区別が出来ないということになる⁽⁹⁾。

■2拍名詞 LH型 7.「夜」の下降3例、単独譜1例以外はすべて上昇旋律である。「夜」の読みは㉔がヨルであることに倣って、他例についてもヨルと仮定したが、ヨという解釈も排除できない。「春ノ夜」商徴(ル)-徴-徴角..㉒、「秋ノ夜」商徴(キ)-徴-徴角㉓、「秋ノ夜」商徴(キ)-徴-徴角..㉔のいずれも、ヨであれば博士譜は不自然ではない。

1. 跡(アト): 上昇1(助詞ヲ低接1) 「跡ヲ」宮(ア)角(ト)-宮[角]..㉑
2. 糸(イト): 上昇1(助詞ヲ低接1) 「糸ヲ」徴(イ)羽(ト)-徴角..㉒
3. 種(タネ): 上昇1(助詞ヲ低接1) 「種ヲ」宮(タ)角(ネ・虫損)-宮[角]..㉓
4. 中(ナカ): 上昇1(助詞ヲ低接1) 「中ニハ」徴(ナ)羽(カ)-徴角..-角商..㉔
5. 松(マツ): 上昇1(助詞ヲ低接1) 「松ヲ」徴(マ)羽(ツ)-徴角..㉕
6. 眉(マユ): 上昇1(助詞ヲ低接1) 「眉ニ」徴(マ)羽(ユ)-宮羽㉖
7. 夜(ヨル): 上昇1・下降3・単独譜1
上昇:「夜」宮(ヨ)角(ル)..㉗
下降:「夜」徴角..㉘、「夜」徴角㉙、「夜」徴角..㉚
単独譜:「夜」徴㉛

■2拍名詞 LF型 助詞は8.「窓ヲ」徴(マ)羽(ト)-[角]羽㉛のみ、同じ高さで付くと一応見なした。助詞に当たる部分の旋律は[角]羽となっている。本稿の資料では[角]のように短い構成譜は、直後の羽を主とする、ある種の装飾音かとみなし、拍の音調を担いうる旋律から外している。ここでは[角]を低接と無理に見ることはせず、例外として処理しておく。

1. 秋(アキ): 上昇7(助詞ノト低接4・助動詞ナリ低接1) 「秋」宮(ア)角(キ)㉜、「秋」徴羽(キ)㉝、「秋ト」宮(ア)角(キ)-宮[角]..㉞、「秋ト」徴(ア)羽(キ)-徴角..㉟、「秋ナリ」宮(ア)商(キ)-宮[角]..-宮角..㊱、「秋ノ」宮(ア)角(キ)-宮[角]..㊲、「秋ノ」宮(ア)角(キ)-宮[角]..㊳

(9) なお只博士で旋律が記される因空本においてはLH型の半数以上に高く付くべき助詞が高く付いている。また助詞が付かない場合であっても、LH型は第2拍に対応する博士譜は屈曲がないのに対して、LF型では第2拍に対応する博士譜が屈曲を含んで旋律が下降しており、両型の区別が旋律に反映されている。

2. 雨（アメ）：上昇3（助詞ノ低接1）・単独譜2

上昇：「アメ【雨】」宮[羽]-角商^⑮、「雨」宮（ア）角（メ）^⑯、「雨ノ」徴（ア）羽（メ）-徴角^⑰

単独譜：「雨」徴（アメ）角^⑩、「雨」宮（アメ）[羽]..^⑳

3. 影（カゲ）：上昇2・単独譜1

上昇：「カゲ【影】」徴角^⑱-羽徴^⑲、「影ノ」徴（カ）羽（ケ）-徴角^㉓

単独譜：「影」宮（カゲ）[羽]..^㉔

4. 声（コエ）：上昇2（助詞ニ低接1）・下降3・単独譜2

上昇：「コエ【聲】」宮[羽]..^⑲-角商^⑲、「聲ニ」徴（コ）羽（エ）-徴角^㉑

下降：「コエ【聲】」徴角^⑲-宮[角]..^㉒、「コエ【聲】」徴角^⑲-宮[角]..^㉓、「コエハ【聲は】」徴角^⑲-宮[角]..^㉔

単独譜：「聲」宮（コエ）[羽]..^㉕、「聲」徴（コエ）角^㉖

5. 露（ツユ）：上昇1 「ツユ【露】」宮[羽]..^⑲-角商^⑲

6. 鶴（ツル）：単独譜1 「鶴」徴（ツル）角^㉑

7. 春（ハル）：上昇4（助詞ノ低接2・ゴト低接1 「春」徴（ハ）羽（ル）^㉑、「春コトニ」

徴（ハ）羽（ル）-徴-徴-徴角^㉒、「春ノ」徴羽（ル）-徴角^㉓、「春ノ」徴羽（ル）-徴^㉔

8. 窓（マド）：上昇1（助詞ヲ同高？1）・下降1

上昇：「窓ヲ」徴（マ）羽（ト）- [角] 羽^㉑

下降：「窓」羽（マ）宮（ト）..^㉒

7.3 真逆の旋律 HL型で上昇・LF型で下降の旋律

表2のうち、HL型であるのに真逆の上昇旋律、LF型であるのに下降旋律を取るものについても検討を加える。結論から言うと、これは孝時所持の只博士本から円珠が五音博士に本譜した際の改変である可能性がある。

表2ではHL型とLF型で旋律が例外となる博士譜を全て抜き出し（LH型で下降となる「夜」は読みがヨの疑いがあるため除く）、円珠奥書を持つ只博士本のうち国会図書館蔵本（第2節参照）の博士譜と比較した。博士譜の記法・解釈は因空本（拙稿2022）にひとまず倣った。表に見るように、円珠自筆本で例外だったものは国会図書館蔵本で全てアクセント型を反映した旋律であったことになる。現存する只博士本は円珠による元奥書を持つものの来歴には不明な点も残っており、五音博士に翻譜される以前の姿を反映するかについては結論を出せる状況には未だないが、五音博士への本譜に際して改変が行われた可能性をひとまずここでは指摘しておきたい。

表2 五音博士本（円珠自筆本）の例外と只博士本（国会図書館蔵本）の記載

	円珠自筆本・五音博士	国会図書館蔵本・只博士
HL 型	上昇「ウチニ【うちに】」宮羽-徴-徴角..③	下降 3rf.-3h-3hf..
	上昇「キタ【北】」宮[角]..-徴角..⑤⑦	下降 1hr.-2hf..
	上昇「皆」宮(ミ)羽徴(ナ)..⑥⑤	下降 1h(ミ)f.f(ナ)
	上昇「ヒト【人】」宮[角]..-徴角..⑧⑧	下降 1hr.-2hf..
LF 型	下降「コエ【聲】」徴角..-宮[角]..⑥⑩	上昇 2hf.-1hr..
	下降「コエ【聲】」徴角..-宮[角]..⑦⑤	上昇 2hf.-1hr..
	下降「コエハ【聲は】」徴角..-宮[角]..徴角..③	上昇 2hf.-1hr..
	下降「窓」羽(マ)宮(ト)..⑩⑥	上昇 1f(マ)h(ト)..

8 結論と課題

本稿では朗詠四古譜のうちもっとも古い書写である円珠自筆本『朗詠要抄』を取り上げ、その五音博士が言語音調を反映するかについて検討を加えた。その主たる結果は次の通りである。

1. 湛智『声明用心集』に示される上下の五音博士は、宮商角徴羽を表す5つの角度に抽象化することができ、その枠組みで円珠本の五音博士も捉えることが出来る。
2. 博士譜は言語1拍と1つの構成譜が概ね対応しており、「複合譜」や「単独譜」を構成する「構成譜」同士の連なりが示す旋律の動きが、言語音のアクセントと原則的に対応する。

すでに報告する因空本『朗詠要抄』同様、特に2拍名詞第3類のLL型が旋律に反映していると推定されることから、基本的には本資料も南北朝時代に生じた体系変化前の京都方言アクセントを反映すると考えてよいと思われる。

ただし、博士譜が言語的な音調を必ずしも忠実に反映するわけではないこと、当然であろうが改めて指摘しておきたい。(1) 句頭位置では言語音のアクセントとは無関係に音楽的旋律の影響が現れることがある、(2) 平らなアクセント型は音楽的旋律の影響を受けやすい、(3) 2拍名詞のうちLH型とLF型の違いは旋律に反映しない、などである。(1)～(3)以外に博士譜と言語的な音調に対応が見られない場合には、只博士本から五音博士本に翻譜される過程で生じたものも含まれている可能性が少なからずあり、アクセント資料として用いる際には、只博士本との比較対照を通じて「よりアクセント型を反映している段階」を推定しておくべきであろう。

円珠本『朗詠要抄』の博士譜に反映するアクセントの予備的分析

参考文献

- 青柳隆志1993『『朗詠要抄 因空本』考』日本語と日本文学19
- 秋永一枝1991『古今和歌集声点本の研究 研究篇下』校倉書房
- 秋永一枝・上野和昭・坂本清恵・佐藤栄作・鈴木豊1997『日本語アクセント史総合資料 索引篇』東京堂出版
- 浅田健太郎1998「声明資料における「ずらし表記」の機能を巡って」訓点語と訓点資料101
- 新井弘順1988「声明の楽譜と記譜法の変遷」『岩波講座日本の音楽・アジアの音楽第4巻』岩波書店
- 小野恭靖1990「『朗詠九十首抄』考―諸本及びその展開をめぐって」中世文学35
- 1993「円珠本『朗詠要抄』（三千院円融藏本）翻刻と解題」大阪教育大学紀要41-2
- 片岡義道1972「天台声明」東洋音楽学会（編）『東洋音楽選書6 仏教音楽』音楽之友社
- 加藤大鶴2022「因空自筆本『朗詠要抄』博士譜に反映する体系変化前のアクセント」アクセント史資料研究会『論集』17
- 2023「『朗詠要抄』と『和漢朗詠集』鎌倉期加点本の去声字のふるまいと位相差：資料横断的な漢字音・漢語音データベースとの比較から」訓点語と訓点資料151
- 蒲生郷昭1978「解説「朗詠譜」」『陽明叢書国書篇第八輯 古楽古歌謡集』思文閣出版
- 金田一春彦1951「日本四声古義」『国語アクセント論叢』法政大学出版会
- 1974『国語アクセントの史的研究 原理と方法』塙書房
- 築島裕1965『興福寺本大慈恩寺三蔵法師傳古點の国語学的研究』東京大学出版会
- 肥爪周二2014「Φ音便について」訓点語と訓点資料132

謝辞 本稿は2024年度拡大アクセント史資料研究会において発表した内容に基づく。席上にてご教示をいただいた先生方に感謝申し上げます。また資料の扱いについては浅田健太郎氏に多くをご教示賜った。大原三千院には原本閲覧に際して格別の配慮を賜った。ここに深甚の感謝を申し上げます。